

■ 目的的なドル売りの流れは一巡する可能性も…

この一週間は、外国為替相場に関わる話題が豊富にあった。

まずは、何より本邦政府・当局による“覆面”でのドル売り・円買い介入である。前回更新分の本欄でも「介入実施の根拠となるのは『水準』ではなく、やはり『スピード』と述べたが、実際、先週21日のNY時間入り後にドル/円がスルスルと上値を試しに行く動きには一定のスピード感が伴っていた。月末になればわかることだが、介入額は5兆円超規模とも言われ、週末のNY終わりまでに捌き切れなかった分の売買注文については、週を跨いだ24日に持ち越された模様である。

国際社会からの承認が得られにくい状況下、やや強引とも思える覆面介入をそれなりにまとまった規模で仕掛けてきたとなれば、市場もこれまで以上に警戒を強めざるを得ない。その意味で、円安方向への投機的な仕掛けに歯止めを掛けるという点において一定の効果はあったものと思われる。

ただ、今週明けから執筆時まで続いているドル/円の下げは、必ずしも介入警戒感の高まりによるものではなく、既知のとおり、先週末に伝わった米ウォール・ストリート・ジャーナルの記事によって、市場で俄かに米利上げペース減速の見方が拡がってきたことに因る。

前回も述べたように、米国ではすでに住宅業界などが壊滅的な利上げのダメージを受けており、そろそろ利上げスピードに歯止めを掛けないと経済のオーバーキルが現実のものとなる。「もはや手遅れ」という気もしないではないが、少なくとも「12月の米連邦公開市場委員会（FOMC）で利上げ幅を縮小する可能性についてどのように市場に伝えたいものか、11月のFOMCで検討・議論する」という運びになる可能性は高まっている。

米経済指標の弱めの結果が相次ぎ明らかとなるなか、足元のドル/円はジリジリと値を下げてきており、ひとまずは先週末の介入で急落した際に下げ止まった水準である146円処で下げ止まるかどうかを見定めたい。仮に同水準をクリアに下抜けてきた場合は、あらためて50日移動平均線が位置する水準（現在は143円台後半）あたりまで下げ余地を広げる可能性もあると見る。むろん、そろそろ目的的なドル売りの流れは一巡する可能性も十分にあり、ここは大事な見極めどころであると考ええる。

一方、ドル安傾向が強まる状況下でユーロ/ドルが戻り歩調を強めている。下図に見ると



おり、目下は一目均衡表の日足「雲」上限まで上値を伸ばす動きとなっており、同水準をクリアに上抜けるかどうかが目先の焦点となってきた。

ここ数日で21日移動平均線（21日線）が上向きに転じてきているうえ、1.00ドルの節目を上抜け、さらに日足の遅行線が日々線を上抜けてきていることも強気のサインと言える。

果たして、本日行われる欧州中央銀行（ECB）の定例理事会で0.75%ポイントの大幅利上げを決定し、それで一旦「材料出尽くし」となるのかどうか。上げ一服となる可能性もあり、ここはしっかり見極めることが求められる。（10月27日 10:15）